

## 東日本大震災 被災地社叢復興作業見学と報告会 ご案内

2012年2月 NPO 法人社叢学会

NPO 法人社叢学会では、東日本大震災被災地の社叢調査を続けてきましたが、このほど地球環境基金の助成金を得て、2カ所の社叢で修復作業に取り掛かることとし、作業見学会とこれまでの調査の報告会を下記の通り開催いたします。

被災地での社叢の状況をご覧になっていただき、社叢学会の取り組みをご理解いただく機会です。遠路ではありますが、ぜひご参加ください。

### 記

日 時：2012年3月14日(水)

集合時間・場所：9：15 JR 仙台駅前 ダイワロイネットホテル仙台 ロビー

訪問先(専用バスで移動)：狐塚(仙台市若林区荒浜)・八重垣神社(山元町)＝社叢修復作業  
竹駒神社＝活動報告会

定 員：先着 20 名

スケジュール：

|             |   |
|-------------|---|
| 9：30        | 出発 車中で狐塚について説明                            |
| 10：30～11：30 | 狐塚における土壌改良作業                              |
| 11：30～13：30 | 狐塚出発 仙台平野の状況を見学しながら八重垣神社へ(車中で昼食)          |
| 13：30～14：30 | 八重垣神社における残存樹林調査と土壌改良作業                    |
| 14：30       | 八重垣神社出発                                   |
| 15：00～17：00 | 活動報告会                                     |
| 15：00～15：05 | 開催挨拶：千葉博男・竹駒神社宮司                          |
| 15：05～15：25 | 報告1：社叢が育む地域コミュニティ 藺田稔副理事長                 |
| 15：25～15：45 | 報告2：被災地社叢調査の概要 渡辺弘之理事                     |
| 15：45～16：05 | 報告3：社叢の土壌改良について 伊藤和男・大阪府大高等工専教授           |
| 16：05～16：25 | 報告4：社叢復興計画の概要 糸谷正俊理事                      |
| 16：25～16：45 | 報告5：狐塚と八重垣神社社叢の現状と修復方法<br>有田和實・社叢インストラクター |
| 16：45～17：00 | 意見交換                                      |
| 17：10～18：30 | 参加者交流会：参集殿                                |
| 18：30       | 竹駒神社出発 仙台駅へ                               |

以 上



狐塚



八重垣神社

## (2) 仙台・荒浜の狐塚／使者の休憩所、ほぼ無傷



津波の被害を免れた狐塚。近くには浸水の跡が残る＝  
仙台市若林区荒浜

3月11日の大津波で壊滅的な被害を受けた仙台市若林区の荒浜地区。ここに古くから伝わる「狐塚」が、ほぼ無傷の状態に残っている。

<周りに浸水の跡>

狐塚があるのは、海岸から約1km離れた田んぼの中。すぐそばを県道塩釜亘理線が通る。こんもりと1.5mほど周囲より高く、ほこらと小さな鳥居を松が取り囲む。地元には、竹駒神社（岩沼市）と塩釜神社（塩釜市）を往来する「おキツネ様の休憩所」と伝えられてきた。



「おキツネ様の休憩所」と伝えられるほこらと鳥居

狐塚の周りは浸水した跡が残り、倒れた木が転がる。狐塚より400mほど海に近い市消防局荒浜航空分署の屋上に避難したという消防署員は「北東から津波が流れ込み、狐塚の辺りのみみこんだはずだ」と、その日を思い返す。

<所有男性犠牲に>

なのに、何事もなかったかのように姿を保つほこらや鳥居。住民の間では以前から、この周辺は交通事故が多い場所として知られてきた。

荒浜北町内会の早坂勝良会長(70)は「航空分署が盾のようになったのかもしれないが、被害がほとんど無いように見える。交通事故が多かったことといい、不思議な感じがする」と住民の気持ちを代弁する。



狐塚の土地を所有する男性は、仕事に車ごと津波に流され、犠牲になった。「ほこらは17年ほど前に夫が建てた。丁寧に手入れをしてきたほこらだけが残った。夫は守ってもらえなかった」。男性の妻(67)は、複雑な胸の内を明かした。

【訪問日】2010/09/23,2011/03/08

地震後に新聞に掲載された浪分神社と狐塚の地震前の姿。



狐塚。左側は県道塩釜亘理線。近づける道が無く、ぬかるんだ畦を歩くしかありませんでした。

私の大っ嫌いな蜘蛛が大量にいました。



祠は小ぢんまりとしていました。

2011年5月26日付の河北新報には「竹駒神社と塩釜神社を往来する『おキツネさまの休憩所』と伝えられてきた」と記されています。それが本当であったかどうかはさておき、狐塚という地名は全国に存在します(市バス東部工業団地線の終点も「狐塚」ですね)。民間信仰において狐は田の神の使いだと考えられ、元は田の近くに塚を築いて祭場とし、後に稲荷神を勧請して祠を建てたりしました(Wikipediaより)。この場所もよくある祭場のひとつだったのでしょう。お社は17年ほど前に造られたそうですが、その前から小さな石祠や石碑の類はあったのではないのでしょうか。

# ◆ 荒浜狐塚 ◆ 狐さまと人間さまの話

狐塚に竹駒様から  
使者が来る

荒浜地区の北部、県道塩釜・亘理線沿いの田んぼの中に、松林に覆われた百坪程の丘地があります。佐藤家(当主清孝さん)が代々お稲荷さまの祠をお祀りしている狐塚で、付近一帯には同名の小字名が付いています。

この狐塚のお稲荷さまには、岩沼の竹駒神社からたくさんのお狐さまが、田の神の使いとしてはるばる名取川を渡ってくるといふ言い伝えがあります。不審火が列をなして点滅する「狐の嫁入り」も見せていたと、古老達は伝えていきます。

狐塚の東側に広がる松林は昔時より狐の生息地でした。狐達は繁殖と子育てのために狐塚を目標に名取川を渡り、松林に往来したのでしよう。

昭和五十八年頃に県道の新ルートが開通しましたが、昔から稲荷大明神が祀られている狐塚を避け、旧道と反対の西側を大きなカーブを描いて通っています。この伝承を末永く保存したいという関係者の努力もあり、狐塚は今も旧形をとどめているのです。

竹駒ゆめ名取川越え狐火が  
月淡く嫁入りの列塚を行く

狐塚の付近には、狐と人間がかかわる寓話的な伝承が多数残されています。今の孫達には馬鹿な話と信用されませんが、年輩者にとっては含蓄のある楽しいお茶飲み話です。

第一話  
佐藤清孝さんの奥さんの話

木の葉では  
餌はとれぬと主の鶏

この春先(平成四年)のこと、屋敷内で飼っている鶏が、夜中に「コケッコ、コケッコ」と危険を知らせる鳴き声をあげたので、翌朝見廻りにいくと何者かに盗み取られていた。こんなことが再三続いたある日のこと、狐が鶏をくわえ屋敷内をさも親しげに悠々と遠ざかっていったが、その姿には憎めないものがあった。近くの竹藪内に隠してあったのも含め十二羽の被害。狐は鶏を失敬しながら二年程前から住み着いていたことが分った。

そこで当家の奥さんは、ある日好物の餌を盆にのせ縁の下に置き、狐に聞こえるような大きな声で諭した。「おキツネさん、聞かえ、おらえ(家)で狐塚にお稲荷さんを祀り、大事にしてんでガスト。餌やっから、これから悪サしねで、山サ帰らえ。」すると翌朝白い毛の混じった古狐が死んでいた。

佐藤家では心をこめて焼香し、古狐を手厚く葬った。稲荷信仰が厚い当家を頼り、永住の地として本当の稲荷明神様となったのだろう。

第二話 祖父より聞いた話

道まよい狐みちびく  
家路みゆ

終戦の年、夕闇が早い春先のこと、狐塚付近で南小泉からのリヤカーを引く足どりが重くなり、新浜に行く道を間違えた。見ると前方の薄暗がりには狐たちがいる。これは化かされると思い、戻って別の道に回ったが、この道の前方にもいるではないか。

これは大変と考えた当時八十三歳の祖父は、化かされるものかと道端に腰を下ろし、煙草入れを出すと、一服つけながら年並みに心を落ちつかせた。改めて狐たちを見るに、どうも楽しそうに無駄話をしている様に見える。月夜の晩でもないから、化かされることはなさそうだと思った祖父は、狐たちに向かって「アノな狐さん、俺の身内が昔この塚の近くの松林で、アンタ達の先祖を鉄砲打ちから守ったり、社建てたりして祀ってるんだ、道に迷ってるから、教えてケサイ。」と話しかけた。ところが狐達は知っていると云わんばかりの様子。「間違った別の道に入ったから、その度にトウセンボしていたんだ。暗いから手を引いて教えてあげるヨ。」と話しかけてきたような気がした。すると重い足が急に軽くなり、狐に手をとられるようにして家路についた。

### 第三話

安達家のおばあちゃんの話

一晩に七里四方と狐馳せ

これも終戦の年、貞山掘沿いの安達平三郎さん宅でのこと、道路沿いのお明神さまが、馬車からの

転倒物により破損したので、家中に安置した。

ところが、夜中に「ガッタン、ゴットン」と戸を叩く大きな音が響いた。家人は驚くが、当時三十二歳だったおばあちゃんは、狐さんのお呼びと気がついた。さっそく部屋の戸締まりを開け、お狐さまを外に出し、こと無きを得た。狐は夜に活動する範囲が七里四方といわれるくらい広い。移動時の速さも非常に速い(時速四十五〜五十キロメートル)という。翌朝、深くお詫びの上、元の台座に修復安置した。

### 第四話 最近の狐塚

ライトにも憶せず棲むか狐塚

この二〜三年前より、初夏の宵時分頃、田の水廻りの方が狐塚付近の田にて狐を時々見かけることから、近年、狐の数が増えているのか。

狐塚の前の県道は、七北田川の新設橋が開通してから、夜間も相当地な走行車両であるが、狐塚に棲む狐さんも、大型トラックのライトに慣れて驚かないのだろう。

### 第五話 佐藤清孝さんの話

塚の松切つて崇られ二代目を

一六八年くらい前のこと、狐塚の所有者佐藤家の先祖が母家を新築することになり、主人の言いつけで雇人が塩釜まで材木を買いにいったが入手できなかった。雇人は主人に叱られることを恐れ、当家の持ち山である狐塚の松の大木を、内緒で(次ページへ)

切り出し建材とした。ところが、めでたいはずの新築後より不運が二代も続いたので、占ってもらったら狐塚の松を切った祟りがあるとの宣告である。驚いた当主は、早速それなりの松を植えると共に、お詫びの祭りを行ない許しを得た。そして後日、家も建て直したそうだ。

当家は今でも、お稲荷さまと緑映える大樹の松を、狐塚の地に守り続けている。舗装道路よりの狐塚の遠景は、絵になる風情をととめ、道行く人々の目を楽しませている。

#### 第六話 狐に化かされた話

月の夜に足音だけで魚なし

孫達には馬鹿な話とソッポ向かれる昔ばなしだが、。満月の晩、この塚の付近を一杯きげんで一人の男が手土産をぶら下げやって来た。あたりは明るく遠方まで見えるのに、スタスタと後ろから足音が近づきだれかが通り過ぎて行った。気になげながら帰宅すると手土産の魚が全部ない。「アッあの時か」とは後の祭り。

これくらいだと笑ってすませられるが、では次のお話を。

#### 第七話 狐に化かされた話

稲荷をばいじめ脅して化かされる

これも満月の晩、明るい足元の悪い馬車道を、「祝儀帰りの羽織姿での一杯きげん。手に土産の風呂敷持つて狐塚にかかる。「騙されるものか、キツネめ出て見ろ」とつぶやいたら、ナント、長い尾をた

らしサツと現れた。「この野郎」と持っていた石を投げつけ、逃げる狐を更に脅した。安堵し帰宅を急ぐと、明るい道を前方より美人がやってくる。狐め化したな？と近づくと、隣村の昔の恋人ではないか、と思つた瞬間、力が抜け気持ちはグニャリ。その後は恋人も脱いで、「いい湯だな」。

この後が悪い。湯上がりで一層酒がまわり、着物も土産もなしの素足、それも唄がけの楽しさ。帰宅後、家人が何度声をかけても返事なし、正気に戻つたのは翌日の夕方。祖母がお明神さまにお参りし、許しを乞うた後だった。

#### 第八話 曾祖母より聞いた話

狐穴餌をそなえて冬さむし

祀られてお稲荷さまも子が栄え

朝日が差しはじめた広い堀沿いのさわやかな松林。その一隅にある稲荷明神さまに、朝早くお参りに来た曾祖母は、信じられない異常な光景を目にした。二人の男が狐穴をふさぎ、別の穴より真山堀の水を汲み入れ、出口の穴でお狐さまを仕留めようとしているではないか。

一人だった曾祖母は、その気配にのまれ立ちすくむばかりであったが、持ち山の松林に棲む狐さまを、先祖代々社を建て稲荷明神として祀ってきた厚い信仰心より、身を奮い起こして声を出した。「アソタ達何してんのッシャーおらえの山で神様撃つとは何ごとでガスやめサイ！」作業に夢中になっていた二人は、良心の咎めもあったのか相当びっくりしたようで、「なに言う婆、俺の勝手だ、文句あつ

か！」と怒鳴り声をあげ、曾祖母に鉄砲を向けて、「撃つぞ、文句を言つてると撃つぞ」と脅した。気の強い曾祖母は怯えることなく、「人間に鉄砲を向け脅すとは何ごとでガス。」と声を大にし狐取りを止めさせようとしたが、男二人には対抗できないと思ひ、狐を心配しながら逃げ帰った。

後日、鉄砲で脅迫したごとく、お稲荷さまに謝罪しないことにより裁判となった。その後、和解となつたのはよかったが、この男達は共に、怪我をしてから長患いとなる祟りがあったと伝えられている。

曾祖母の行いと先祖よりの信仰により、その後の子孫に狐の恩返しがあったというが、その内容が楽しく面白いもので二話と九話に紹介した。

#### 第九話 叔父の話

満月にブラシルためと姫に化け

大正の初め、八話の曾祖母の孫で私の叔父にあたる当家の次男坊が、農学校を卒業して間もなくブラシル開拓を夢見た。親の反対にもめげず渡航の決意は堅かった。

ある満月の夜更けのこと、寝所の広い前庭が真昼のように明るくなり、天空の目にも眩い金色の光の中から何かが現れた。これに呼び起こされた次男坊は、庭に進み出て正座し「お稲荷さまの言う通り、行きません。」と深々と頭を下げながら答え、しばらく座っていたが、やがて布団に戻り眠りこけた。

一緒に寝ていた曾祖母は、孫が気が狂ったとわめき、家中大騒ぎになったが、本人は翌々日の朝ま

で眠り続けた。二日後何気ない顔で起きて来た次男坊は、「夕べ、お稲荷さんの使いの姫さまが急ぎの報せのため天女になりやうてきて、『ラジカルでは今流行病があるから、行くのは止めなさい。』と言っているので、『ハイッ、止めます。』と答えたと。』と言った。家族は、驚くやら、安心するやら、暫らくの間ただア然としていた。曾祖母達はお稲荷さまに感謝し、自家の持ち山である松林の稲荷明神さまの社を新しく改修した。

十余年後、この次男は軍隊を除隊し、官庁に就職した。これを機に、長兄達とお稲荷さまの社を修復し、コンクリート柵を設置し、感謝の祭りを催した。昭和八年十二月のことである。

その後、提灯堀沿いにあるこの社は「汀沈稲荷大明神」と命名され、荒浜の遠藤長三郎さん他の有志の手により昭和六十年六月に新築された。新しいお社は銅版葺き屋根で木の香も高く、周りの紅葉と共に静かに貞山堀の水面に映えている。



荒浜狐塚

「七郷と周辺の稲荷神社位置図」

- ①新浜 吉成稲荷神社
- ②新浜 旧村社吉窪社
- ③岡田 貞山堀沿 汀沈稲荷大明神社
- ④荒浜 狐塚 稲荷明神 (佐藤清孝氏所有)
- ⑤荒浜 旧村社湊大明神 (自治会長・佐藤平蔵氏所有)
- ⑥荒浜 保食稲荷神社 (大学源蔵氏所有)
- ⑦赤沼 旧村社島山稲荷大明神社
- ⑧三本塚 稲荷大明神社 (安達一郎氏所有)
- ⑨種次 稲荷大明神社 (大友清氏所有)



第十話 狐の嫁入り今昔

口の泡狐火となる嫁入りか 昭和の初め頃には、春より秋口にかけての宵時分、狐塚の付近によく狐火の嫁入りが見られた。

私が子供の頃に見たときは、怖いものを見た驚きと共に、提灯の火が横に並んだように見えたのを覚えている。それはついたり消えたり、消えたかと思つと、異なつた方に現れたりした。キツネの口のアワが光るのだと祖母から教えられた。

近年(一九七七年)、狐火は光の異常屈折現象によるとの説が発表され、今は定説となった。荒浜の狐火も、岡上街道沿いに走行していた客車の電灯が、名取川とその高い堤防の地形により屈折を起こした現象と私は考察している。

この狐火は、もう二度と見ることはできないのだろうか。新町団地の奥道沿いの一列に並んだ二十本の照明灯は、現代の狐火か。団地の民家の明りも満天の星の光のような賑やかさで、この狐火を盛り上げている。この高い位置に光

を放つ道路照明灯が明滅してくれたなら、「狐の嫁入り」となって更に狐塚に花を添えてくれるだろう。今はせめて「狐の嫁入り」の話をこの狐塚の名と多くの伝承と共に、末永く語り伝えていきたい。

一列に並ぶお稲荷さま

古くからこの辺りは稲荷明神信仰が盛んである。竹駒神社がこの地に近いこと、また田の神様であることにより、農業生活に密着した信仰として住民の心の中で長年のうちに高揚されてきたのだろう。現在でも屋敷神として多くの民家に祀られている。

不思議なことに、この辺りに点在するお稲荷様のお社は竹駒神社と荒浜の狐塚を結ぶ一線上に並んでいる。何か意味がありそうである。お稲荷さんが竹駒神社から荒浜まで通る道だったのだろうか。

延長線上にも足を運び調べたところ、南は太白区四郎丸に一社。北は七ヶ浜町に三社、塩釜市に七社、松島町に二社があった。偶然の一致かもしれないが、更に興味の引かれるところである。コンコン。(加藤正明)

#### 4. キツネ塚

佐藤家の氏神は、明神様または稲荷大明神とよばれ、屋敷から北西の山林に祀られている。以前は大きな祠、鳥居があったがアイオン台風でなくなり今は2つの小祠があるだけである。祭日は旧10月1日で、この日は竹駒神社のお稲荷様が塩釜の水島へ行く為にお泊まりになる日といわれている。祭日には2つ重ねの餅、あぶらあげを供える。

ここの神様は大変に祭る。昔荒浜の人が寒いのでキツネ塚で野火を焚いたところ、家の若い人が早死にしたり大病をしたりした。そこで拝んでもらうとキツネ塚のぼちであったという。

このキツネ塚は2軒で祀っていた時期があり、毎年赤い旗をたてたということであるが、その後1軒で祀ることになった。

また、家を新築したがその時塩釜に予約しておいた大黒柱用の材木が手違いから買うことができず、キツネ塚の杉の木を使用したところ家に不幸が続いた為、その杉の木を深神社に奉納したという昭和初期の話もある。

大病をしたため、拝んでもらったところキツネ塚の祭りであったということもいくつか聞かれる。

#### 5. 八大龍王(ナミキリフドウ)

土地の人は八大龍王を「ハツテラサマ」と呼び、祭日は、旧2月25日である。八大龍王は、佐藤家によって祀られており、祭日も佐藤家の氏神の祭日である。漁師の神様であり、酒が大変好きな神様とされている。大漁の時には、やぐらを作り、仙台から踊り子をよび、盛大にお祭をする。

八大龍王の碑は海岸に向かって南東に建っている。これは、南東の風は「ナサケの南東風(いなき)」といって、これが吹くと大漁であるからだという。碑には、「文政七甲申年(1824)8月朔日」の銘がある。

#### 6 大日如来・八幡様

現在の細谷登家の土地には、住む以前から大日様、八幡様、庚申様の3つの神様が祀られていた。細谷家は、細谷登氏の一代前より笹新田から石場のこの地へ移ってきたのであるが、

それ以来大日如来と八幡様を細谷家及び石場の人たちで講を組み祀るようになった。明治7年の講中には、中沢久太郎、佐藤庄吉、佐藤清蔵、浜口栄五郎、中沢舜太郎、伊藤千三郎、今野善治、鈴木岩五郎、中沢長之助、鈴木丑蔵、細谷養作が入っており、この年、講中で旗をあげた記録がある。5～6年前までは、講としての集まりをもって現在では細谷家のみで祀っている。

祭日は、大日如来が旧9月19日、八幡様が旧3月15日である。祭日の前日は、祭に参加する家から当番の人がお金を集めて御馳走を作る。祭の当日には朝から当番の人が祠を掃除して旗を揚げ、赤飯と野菜をあげる。朝7時頃から石場の人たちが集まり、神様の前にむしろを敷き赤飯を食べた。夜は当番の家で酒を飲む。当番は2名が当る。藤田から神主をよび、お威いをしてもらう。盆、正月は細谷家の人が餅を籠に入れ、供える。現在大日如来、八幡様は細谷家の屋敷神として祀っている。

庚申様の石碑は、中沢家の氏神として石場に祀っていたがその土地を交換したためその場所が他人のものとなった。その頃家族のものが病気になる、拝んでもらったところ、鈴ふり馬車で大日如来の石碑を中沢家の屋敷内に運べといわれ、それ以来(約20年前)屋敷内に祀っている。石碑はほとんど土に埋もれた状態だったが今は祠に置かれている。この石碑は、つい最近まで庚申様(オコシンサマ)と信じられていたが、氏家氏という郷土史家が訪ねてきてこの石碑を調べたところ、大日如来であることがわかった。この大日如来の祭日は、旧10月15日であり、石場にあった時は、祭日に中沢ハルヨさんと子供たちとで15人分ぐらいのお膳とおふかしを持ってゆき、大日如来の前に親戚の人たちをよんで御馳走をした。

この神様は、きびしい神様で悪い事をするとはちをあてる神様だった。  
現在では、毎日水をあげ、お賽銭をあげて拝んでいる。

#### 7. 馬頭観音

神明社の南に、「バクイ」とよばれる馬頭観音の碑がある。ここは大型車が行き交う道端のため、土の中に埋もれて、5cmほどしか見えない碑もあるが、現在は11基ある。

一番新しいのは、1年ほど前、ある人が夢見が悪いので拝んでもらったところ、以前飼っていた馬の祟りだということで、すぐに馬頭観音の碑を建てたということである。

調査報告書第2集  
仙台市荒波の民俗 S.56.3  
(財)仙台教育文化事業団  
仙台市歴史民俗資料館発行

## 山元町 八重垣神社



### ＜八重垣神社＞

応永16年(1409)に藤波祥学の祖、堯雄(ぎょうゆう)が伊勢神宮に詣でて、スサノウノミコトの神霊を乞い、牛頭天王(ごずてんのう)と称し鎮守したと社伝にあります。社殿は寛政年間(1789～1801)に造営されたもので、総檜造、彫刻「かご彫り」があります。

例祭は旧暦6月15日の前後のどちらかの土日にかけて行われ、仙南地方の三大夜祭として広く知られています。

本祭りでは神輿渡御が行われ、およそ30人の担ぎ手によって笠野の海へと入っていく豪快な祭りの姿を見ることができます。



鳥居



洗い場

宮城の旅 (<http://miyagitabi.com/yamamoto/yaegakijinja/index.html>) より

47NEWS > 共同ニュース > 神社流失も、みこし発見 「新たな信仰の場に」宮城県山元町

### 神社流失も、みこし発見 「新たな信仰の場に」宮城県山元町

「お天王さん」と地元で親しまれてきた宮城県山元町高瀬の八重垣神社が、東日本大震災の津波で流失した。807(大同2)年の創建と伝えられる町指定文化財。ただ、近くの元総代長宅で夏祭りのみこしが見つかり、宮司の藤波祥子さん(55)が活用策を検討している。八重垣神社はスサノオノミコトを祭り、初詣や夏祭りには地元だけでなく、近隣の亘理町や福島県新地町からも大勢の人が訪れていた。



2011/04/29 14:22 【河北新報】

津波に流されながらも見つかったみこし=27日、宮城県山元町高瀬の天神社